

仮名本『曾我物語』における梶原景季について

小井土 守敏

はじめに

『曾我物語』の真名本と仮名本とは、物語の主題が異なる。真名本では、曾我兄弟が敵討ちを遂げるまでに葛藤や苦悩をするところに主題があるのに対し、仮名本では、兄弟が如何なる艱難辛苦の末に敵討ちを遂げたのかというところに主題がある。

仮名本『曾我物語』では、曾我兄弟が敵討ちを遂げるまでに、真名本『曾

我物語』には見られない様々な障害が設定され、兄弟の敵討ちという行為自体が、如何に難関極まるものであったかを強調する。本稿で取りあげる梶原景季は、頼朝の命を受け兄弟を召しに赴き、兄弟が密かに随行する狩庭で兄弟を尋問し、また、兄弟を騙して狩庭から遠ざけようとし、兄弟に好意的な畠山・和田と兄弟のやりとりにも不審を抱き、遂には兄弟の屋形を襲撃する。他に、女性を巡って時致と争う等、敵討ちを阻む者として多くの場面に登場させられており、仮名本『曾我物語』において大きな役割を与えられている。しかも、景季のそうした登場場面の多くは、仮名本に増補された記事においてである。物語における梶原景季の登場場面を、父景時と併せて整理すると、次表のごとくである。

■『曾我物語』梶原景時・景季登場場面 一覽

真名本の章段名は、便宜上、東洋文庫の¹⁾小見出しに依る。

No.	真名本	仮名本
1	景季、左衛門尉に任せられる。 (巻四・頼朝助経の栄華)	×
2	×	景季、頼朝の命により、兄弟を召しに行く。 (巻三・源太、兄弟めしの御つかひにゆきし事 く祐信、兄弟つれて、鎌倉へゆきし事)
3	×	景時、頼朝に兄弟助命を願うが叶わず。 (巻三・人々、君へまありて、こひ申さるゝ事)
4	景時、侍達に鬼の如く怖れられている。 (巻四・頼朝官根参詣)	景時、侍達に鬼の如く怖れられている。 (巻四・箱王、祐経にあひし事)
5	景時・重忠、兄弟の登用を願う意志があった(兄弟死後の回想)。 (巻五・五郎、縁者の間に止宿)	×
6	景時・重忠、鷹狩について論争する。 (巻五・畠山重忠の鷹談義)	×
7	景時、茂間の狩開催を通告する。	景時、茂間の狩開催を通告する。

22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8
×	×	×	二宮太郎、富士野狩欠席の旨、景季を通じて申請する。 (巻七・二宮太郎に達う)	×	×	景季、富士野の狩開催を通達する。 (巻六・富士野の狩のことを聞き、兄弟決意を固める)	景季、頼朝の命により那須野の狩の勢子を召集する。(巻六・那須野の狩) 景季、富士野の狩開催を通達する。	景季、宇都宮の女房を頼朝に説明する。 (巻六・頼朝、宇津宮朝綱の女房を賞す)	景季、赤城山で頼朝と連歌を詠む。 (巻五・頼朝、那須野へ向かう)	景季、海野、角田川で歌を詠む。 (巻五・三原・長倉の狩)	景季、三原野で海野と連歌を詠む。 (巻五・三原・長倉の狩)	×	×	×
			○			○	○	○	○	○	○			
景季、鹿を射外すが、歌によって恩賞に与る。	景季、重保、鹿をめくり論争する。 (巻八・富士野の狩場への事)	景季、頼朝の命により富士野の狩の勢子を召集する。 (巻八・富士野の狩場への事)	二宮太郎、富士野狩欠席の旨、「梶原」を通じて申請する。 (巻七・二宮太郎にあひし事)	母の言葉の中に、重保の今様とともに「横笛の上手」として景季が紹介される。 (巻七・勘当ゆるす事)	景季、遊女の出家で五郎を恨む。 (巻五・五郎、女に情かけし事)五郎が情かけし女出家の事	景季、五郎と遊女を争う。・景季、歌の道に長ける。 (巻五・三浦与一をたのみし事)	×	×	×	×	景季、三原野で頼朝に請われ歌を詠む。 (巻五・三原野の御狩の事)	景季、三原野の狩場で、頼朝の言葉伝える。(巻五・三原野の御狩の事)	兄弟、和田からの使者を、景季の襲撃と思ふ。 * 太山寺本にナシ (巻五・五郎と源太と喧嘩の事)	景季、浅間の狩場で兄弟を見とがめる。和田義盛の仲裁により、兄弟は助かる。 * 太山寺本にナシ (巻五・五郎と源太と喧嘩の事)
○	○	○	○	○	●	○					○	○	●	●

(巻五・頼朝三原の狩場へ出発、兄弟道に助経を狙う)

* 円成寺本は景季とする

(巻五・浅間の狩の事)

23	景季、頼朝の命を受け、兄弟を賺そうとする。 <small>(巻七・兄弟、頼朝の賺し文句を見抜く)</small>	●	景季、兄弟を賺そうとする。 <small>(巻八・富士野の狩場への事)</small>	●
24	×		景季、畠山重忠が兄弟に贈った和歌に不審を抱く。 <small>(巻八・富士野の狩場への事)</small>	●
25	×		景季、和田義盛が兄弟に発した言葉に不審を抱く。 <small>(巻九・和田の屋形へ行し事)</small>	●
26	×		景季、兄弟の屋形を襲撃する。 <small>(巻九・兄弟屋形をかゆる事)</small>	●
27	×		警護の者、「梶原」の命令を忠実に守る。 <small>* 太山寺本、彰考館本にアリ</small>	●
28	×		兄弟、景季の屋形前を通過する。 <small>(巻九・屋形くにてとがめられし事)</small>	○
29	頼朝、五郎の助命を思うが、景時、斬罪を勧める。 <small>(巻九・頼朝、五郎を尋問)</small>	○	×	
30	祐信、景時を通して出家を願い出る。 <small>(巻十・第三年の法要、母の出家、往生)</small>	○	×	

記事内容の下に付した○は兄弟の敵討ちに対して無関係あるいは中立であるもの、◎は兄弟に友好的・好意的なもの、●は兄弟の敵討ちにとって障害となる記事であることを示している。仮名本では、景季が兄弟にとって障害となる記事が圧倒的に多いこと、その仮名本の記事は真名本にないこと、そして真名本では父景時が、仮名本では子景季が多く登場させられていることが一見してわかる。

本稿では、この梶原景季に焦点を当て、『曾我物語』における景季の人物造型の変遷を跡付け、仮名本で曾我兄弟の行動を阻む人物として造型されていることを確認し、なぜ景季にそのような役割が与えられたか、景季

が兄弟を妨害するという設定によって、物語にどのような変化がおこったのかという問題について、父景時と併せて私見を述べてみたい。

平氏家人であった梶原景時は、石橋山の合戦の際、稻山の岩屋で源頼朝を救う(『吾妻鏡』治承四年八月二十四日条)。以後、『吾妻鏡』によれば、翌治承五年正月十一日、初めて頼朝に面謁し、「文筆に携わらずといへども、言語を巧みにするの士なり、専ら賢慮に相叶う」人物として、鎌倉幕府草創期の柱石をなしていく御家人となる。初めての謁見から間もなく、

若宮造宮奉行(治承五年七月)、北条政子出産の雑事奉行(寿永元年七月十二日条)と、大きな仕事をこなし、源平の合戦では、木曾義仲追討の戦勝報告が鎌倉で評価され(寿永三年正月二十七日条)、平重衡生捕(寿永三年二月七日条)などの軍功をあげている。文治元年四月二十一日の条には、「凡そ和田小太郎義盛と梶原平三景時とは、侍別当、所司なり」とあり、鎌倉幕府体制の基盤である御家人の指揮管理をする侍所の次官、侍所所司であつた。こうした幕府の要職にあつた景時の、頼朝への報告あるいは進言は、「讒言」として『吾妻鏡』に記されている。それらを列挙していくと、義経について讒言(元暦二年四月二十一日条)し、土佐住人夜須行宗について壇ノ浦合戦の軍功について誤認、「讒訴之科」として鎌倉中の道路の普請を命ぜられ(文治三年三月十日条)、畠山重忠を讒訴(文治三年十一月十五日条)、越後守安田義資が女房の聴聞所へ艶書を投じたことを訴え、義資は梟首(建久四年十一月二十八日条)、安達景盛を讒訴(正治元年十月十九日二十七日条)、結城朝光を讒言(正治元年十月二十七日条)した事等が挙げられよう。こうした景時の態度が御家人たちの反感を呼んだことは、正治元年十月二十七日の条、三浦義村の

凡文治以降、依景時之讒、殞命失職之輩不可勝計、(略)併起自彼讒、其積悪定可奉帰羽林、為世為君不可有不対治。

という発言に集約されており、翌二年正月二十三日、梶原一族は滅亡を迎える。

『吾妻鏡』には、こうした、讒言する者としての記載の他、歌よみとしての景時も記されている。建久六年四月二十七日の条では、住吉社に將軍の使者として奉幣、歌一首を柱に記したとある。また、藤原実定との交友もあつて、歌に関する教養は高かつたようである。

一方、子息景季に関しては、養和元年四月七日「殊に弓箭に達する者、

亦御隔心無きの輩」として、頼朝寝所に近侍すべく選出される記事に始まり、文治元年四月十五日、左衛門尉任官、正治二年正月、一族の滅亡の記事に至るまで、これも多くの記事が載る。父景時同様、頼朝の近辺に伺候し、頼朝の有力御家人の一人であることがわかるが、景時のように、讒言する者として記述されることはない。

たとえば、文治元年十月六日の条、京で義経と接触して鎌倉へ戻つた景季の報告は以下のとおりである。

梶原源太左衛門尉景季自京都帰参。於御前申云。参向伊予守亭。申御使由之處。称違例無対面。仍此密事以使不能伝。帰旅宿。六条某時。相隔一兩日。又令参之時。乍懸脇足被相逢。其鉢誠以憔悴。灸有數力所。自試達行家追討事之處。被報云。所勞更不偽。義経之所思者。縦難為如強竊之犯人。直欲糾行之。況於行家事哉。彼非他家。同為六孫王ノ余苗。掌弓馬。難准直也人。遣家人等之許。輒難降伏之。然者早加療治。平癒之後可廻計之趣。可披露之由云々者。二品仰曰。同意行家之間。構虚病之条已以露顯云々。景時承之。申云。初日参之時不遂。面揮。隔一兩日之後有見参。以之案事情。一日不食。一夜不眠者。其身必悴。灸者又雖何力所。一瞬之程可加之。況於歴日數乎。然者一兩日中被相構如然之事。歟。有同心用意分不可。及御疑貽云々。

この報告には、景季自身の意見や思惑は見られない。在京中の義経を偵察してきた報告であるが、景季は、忠実に任務を果たしているだけである。『吾妻鏡』の記述に依れば、景季の報告によって、頼朝が義経に叛逆の嫌疑を掛け、景時がその疑惑を強調しているのである。

また、景季は、父景時同様、歌よみとしても記されている。文治五年七

月二十九日の条は、次のごとくである。

越白河関給。関明神御奉幣。此間召景季。当時初秋候也。能因

法師古風不思出哉之由被仰出。景季扣馬詠一首。

秋風ニ草木ノ露ヲ私セテ君ガ越レバ関守モ無シ

奥州秦衡征伐の途上、白河の関で頼朝に歌を所望され、景季は一首詠進している。奥州征伐の最中には、景季の弟景高も歌を詠進し、頼朝の御感に与る記事(文治五年八月二十一日条)があり、歌道に通じた家であつたことがわかる。

『吾妻鏡』の記述から、侍所所司景時は、讒言する者であることがわかる。子息景季は、その人柄について特筆されることはなく、一御家人として頼朝に忠誠を尽くし、父とともに滅んでいった人物なのである。

『玉葉』には、正治二年正月二日、景時一族失脚の様が記され、翌二月二日の条には、

景時討伐必然云々、天下悦也、積悪之輩、尽数滅亡、

とある。景時の死は、「天下の悦び」であると兼美は記しているのである。

『明月記』も、梶原一族滅亡の記事を記すが、『玉葉』のようにには定家の個人的な感情表現は見られない。

『愚管抄』に、次のような記事が載る。

其比不力思議ノ風聞アリキ。能保入道、高能卿ナドガ跡ノタメニムゲニアシカリケレバ、ソノ郎等ドモニ基清・政経・義成ナド云三人ノ左衛門尉アリケリ。頼家ガ世ニ成テ、梶原ガ太郎左衛門尉ニノボリタリケルニ、コノ源大將ガ事ナドヲイカニ云タリケルニカ、ソレヲ又、「カクコレラガ申候ナリト告タリケルホドニ、ヒシト院ノ御所ニ籠テ、「只今マカリ出テハコロサレ候ナズ」トテ、ナノメナラヌ事出キテ、頼家ガリ又広元ハ方人ニテアリケルシテ、ヤウクニ云テコノ三人ヲ

三右衛門トゾ人ハ申シ、コレヲ院ノ御前ワタシテ、三人ノ武士タマハリテ流罪シテケリ。(卷六・土御門)

景季が源通親に基清・政経・義成を告げ口したことは、『愚管抄』以外には見られないものであるが、このことが事実であれ風聞であれ、『吾妻鏡』などには見られなかった。景季の人物像が窺える。なお、同書卷第六・順徳にも、「鎌倉ノ本鉢ノ武士」とされる梶原一族滅亡の記事が載るが、ここに記されているのは主として景時評である。一族滅亡の記事は、『六代勝事記』にも載るが、『愚管抄』とはほぼ同様である。

幕府の記録である『吾妻鏡』と、京都の貴族の日記『玉葉』と、それぞれの史料の性格を考慮すべきではあるが、これらの史料からは、景季は頼朝の忠臣であるということが窺い知れるのみである。『愚管抄』にわずかに告げ口をする景季が見られるが、讒言する者として固有の人物像をもつのは景時である。

以上が、史料に見られる梶原である。

二

『曾我物語』真名本・仮名本においても、史料に記すとおり、梶原景時・景季父子は頼朝の側近として登場させられている。まず、頼朝の側近として登場させられた梶原父子を、真名本と仮名本とで比較してみる。

『曾我物語』の中で記される巻狩は、奥野の狩と、浅間から那須野に至る北関東圏での巻狩、富士裾野の巻狩との三回である。奥野の狩庭で、兄弟の父河津祐重が工藤祐経の家人等に殺害された。浅間・那須野の狩には、兄弟は仇敵祐経を狙うが討ち果たせず、富士野の狩庭で、兄弟は敵討ちを遂げ、そして世を去るのである。

浅間の狩開催は、真名本・仮名本(円成寺本を除く)とも、景時が通達し

たとする(一覽7)。ところが、富士野の狩開催(一覽16)については、

【真名本】鎌倉殿召梶原、侍共无_レ左右暇不_レ取、東国狩庭雖多、
過_レ富士野无_レ名所、狩其野被_レ仰、景時承亦被_レ露此由。(卷六)

【仮名本】又、鎌倉殿、梶原をめされて、おほせくだされけるは、「侍どもに、暇とらすべからず。狩場おほしといへども、富士野にまさる所なし。ついでにからん」とおほせられければ、景季、この旨を披露す。
(卷五・三浦与一をたのみし事)

と、真名本では景時とする巻狩開催の通達の役目を、仮名本諸本では景季とするのである。

また、景季が勢子を召集したという記事は、真名本・仮名本ともに載せるが、両者で、勢子を召集した狩庭が異なる(一覽15・20)。

【真名本】次日鎌倉殿那須野有_レ御出、曾我人々出宿、出狩場、
上小袖一脱置、自狩庭返手驗、二人女房達出、明鎌倉殿以梶原源
太左衛門被_レ召勢籠者共、随_レ仰進人々誰々、
(卷六)

【仮名本】御寮は、合沢の御所にましくける。梶原源太左衛門をめて、おほせくだされけるは、「昨日の狩場より、富士野はひろければ、勢子すくなくてはかなふまじ。そのよしあひふれよ。うけたまはりて、人々にふれ、射手をそろへけり。(卷八・富士野の狩場への事) 真名本で景季が勢子を召集するのは、那須野の狩であるが、それが仮名本では富士野の狩へと変えられているのである。

北関東の巻狩では、兄弟は、敵祐経を狙い続けるが討ち果たせず、富士梶野の巻狩において敵討ちを遂げる、ということと考えると、富士梶野の巻狩は、『曾我物語』において、非常に重要な狩である。その、富士梶野における巻狩の開催通達と勢子の召集とを、仮名本では、景季に担当させているわけである。景季に、狩庭の指揮を集中させることによって、景季

が、敵討ちの行われた富士梶野の狩庭を取り仕切るような有力者であったことを明示する意図的な改変である。

仮名本では、このように、景季を時の有力者として賞揚する記述が散見する。例えば、北関東の巻狩の記事の中に、

すでに御君御出ありければ、御供の人々は申におよばず、見物の貴賤、野山もゆるぐばかりなり。梶原源太、馬かけまはし、「誰もおるかはあるまじけれども、今日の御狩、御前におきて、高名の人々は、勲功あるべし。忠節を上げませとの御説」とて、はせめぐる、ある、あたりをばらひてぞ見えし。
(卷五・三原野の御狩の事)

とある。「はせめぐる」以下の部分に仮名本諸本で多少の異同が見られるが、勢い盛んな景季が記されているのである(一覽10)。

梶原氏が歌道に通じていた様子も『曾我物語』には描かれているが、この件についても、真名本から仮名本に至る間に父景時から子景季へと変更が見られる。

真名本では、歌よみとして登場するのは父景時である。一覽11・12・13は、景時の歌に関する記事である。真名本には景季が歌を詠んだ記事は見られない。ところが、仮名本になるとその関係は全く逆転する。歌よみ景季が登場させられるのである。

次に掲げる記事は、三原野の狩庭で歌を詠み、頼朝の恩賞に与るという話である。真名本・仮名本両本の対応する箇所を示す(一覽11)。

【真名本】次日鎌倉殿三原有_レ御超、打_レ通離山腰折節、狐鳴走通、
梶原不_レ開敢、鳴_レ浅間_レ昼狐哉口道、信濃国住人海野小太郎行氏不_レ
開敢、忍夜来可_レ云付、手人々感_レ之詠耶、

忍ヒテモ夜コソコウトイフヘキニアサマニナケルヒルキツネカナ
有、鎌倉殿有_レ御感、被_レ引_レ御秘藏御馬二疋、名云_レ大黒・小錫毛、

為連歌引出物、大黒賜海野、小鶉毛賜梶原、取時面目无極、

(巻五)

「仮名本」その日午の刻に、また空にはかにくもり、神なりて、雨やう／＼こぼれ、笠をうるほす。大将殿、景季をめして、「昨日、浅間野の雨は、さておきぬ。又、三原野の雨こそ、無念なれ。歌一首」とおほせくだされければ、源太うけ給て、とりあへず、

昨日こそあさまはふらめ今日はたゞみはらなきたまへ夕立の神と申ければ、鎌倉殿、御感のあまりに、碓氷の麓五百余町の所をぞたまはりける。なる神も、この歌にやめでたりけん、すなはち雨はれ、風やみければ、いよ／＼源太が面目、これにはしかじとぞ、人々申あはれけり。(略) さて、御狩の人々は、日のくるゝをも、時のうつるをもしらずして、かりけるに、馬の刻ばかりに、狐なきて、北をさしてとびさりけり。人々これをとどめむとて、矢筈をとりておつかけたり。君御覽ぜられ、かれらをめし返し、「秋野の狐とこそいへ、夏の野に狐なく事、不思議也。たれか候、歌よみ候へ」とおほせくだされければ、祐経うけたまはりて、「まことに源太が歌には、なる神めで、雨はれ候ぬ。これにも歌あらば、くるしかるまじ。誰々も」と申されければ(略) こゝに、武蔵国の住人愛甲三郎、いだけだかになり、うかべる色見えければ、源太左衛門、「いかさま、愛甲がつかまつりぬと見えて候。はや／＼と申ければ、やがて、
夜るならばこう／＼とこそなくべきにあさまにはしる昼狐かなと申たりければ、君きこしめして、「神妙に申たり。まことに狐におほせてけつうあるべからず」とて、上野国松井田三百余町をぞ給けり。

(巻五・三原野の御狩の事)

真名本では景時・海野行氏の連歌により各々恩賞に与つた場面が、仮名本

では景季の歌が恩賞に与り、また、真名本で景時・行氏の連歌と伝えられる歌に類似した歌が、愛甲三郎の詠とされ恩賞に与つていのである。工藤祐経の言葉からも、仮名本において歌よみとして評価されるのは景季である。

また、仮名本では、富士裾野の巻狩においても、

梶原源太左衛門景季は、いまだ鹿にあはずして、おちくる鹿を待かけつゝ、かけならべ、よつびきてはなつ。され共、上をはるかにいこしとどほりけり。景季、とりあへずかくこそ申けれ。

夏草のしげみが下をゆく鹿のそでの横矢はいにくかりける

君聞めして、神妙なりとて、是も富士の裾野百余町をぞたまはりけり。

(巻八・富士野の狩場への事)

と、景季が歌によって恩賞に与る(一覽22)という、真名本には載らない記事が加えられるのである。

真名本において、北関東の狩庭を巡る間に景時が詠んだとされる、「スミダ河ワタル瀬ゴトニ事トハン昔ノ人モカクヤ有ケン」(角田川(利根川)・大渡にて。一覽12)という歌と、「アカギ山サスガニツカト見ユルカナコシヂノ人モサヤ思ラン」(赤城山・笠懸にて。一覽13)という頼朝と景時との連歌は、仮名本には載らない。歌よみとしての景時は、仮名本に登場させられていないのである。歌をよんで評価されるという件に関しても、景時ではなく景季とすることによって、仮名本では、景季は頼朝に可愛がられる実力者であるという設定を、御家人の統括という面だけでなく、歌——いわば風流を解する——という面でも明示するのである。

ところで、仮名本には、弟時致が化粧坂の遊女と情を交わしていたという一連の記事が載る(一覽17)。この女性を巡って、時致と恋敵となるのが景季である。この件も、兄弟に対立する景季という仮名本の設定が見ら

れるわけであるが、いま問題にしている歌という点に限って見ると、その記事中、景季と遊女の歌の贈答の後に、「その頃、源太左衛門は、歌道には、定家・家隆なりともとおもひしなり。」(巻第五・五郎、女に情かけし事)という詞が記されている。仮名本では、当代の歌よみとしての景季が強調されるのである。

真名本においては、頼朝側近の侍であり、頼朝の前で歌をよむのは景時である。それが仮名本になると、景時は物語には殆ど登場させられなくなる。物語における景時の存在は極端に希薄になり、子息景季がその位置に置き換えられた。真名本に載り仮名本に載らない梶原氏に関する記事は、景季の左衛門尉任官の件(一覽1)以外、すべて景時に関する記事なのである。すなわち仮名本では、景季が、側近として歌よみとして、頼朝に高く評価される人物となつて登場させられているのである。

三

次に、景季が、どのように主役曾我兄弟と関わるかを見ていく。

仮名本に増補された記事に、幼少の兄弟が鎌倉へ召し出され、切られそうになるという記事がある(一覽2)。その使者として曾我の里へ下されたのが梶原景季である。兄弟の母の嘆き、継父祐信の嘆きを目の当たりにした景季は、その哀れな境遇に同情し、兄弟の助命を頼朝に願ひ出る。景季はこの場面でのみ、兄弟にとつて好意的な役割を担わされている。しかし、敵討ちを目標とする兄弟を窮地に陥れる最初の事件の使者が、景季に任せられているのである。頼朝の命令によつて兄弟を召しに曾我へ下る景季が、後のち曾我兄弟の敵討ちを阻害するわけであり、物語の中でそうした行動をとるよう造型される、景季なのである。

景季が兄弟の敵討ちの障害となる役割を担わされるのは、先述の通り、

そのほとんどが仮名本に新たに設定された場面においてである。真名本の段階から兄弟の障害として景季が造型されるのは、次の記事のみである(一覽23)。

鎌倉殿既欲打出狩庭折節、召梶原源太左衛門被仰、(A)昨日曾我冠者原浮嶋原有後馳在何有御尋、景季承仰、候御狩御友候私候仕申、鎌倉殿被聞食此由、其参誰免、不覺召具、(B)何様惣助経覚、又見奴原有様、被失我子昔被思、出伊藤入道役事、遥忘被思出我子事、不安覺、顔魂言柄見勇氣奴原哉、尋合云様、(C)何同富仕、御屋形有大事物具、可有思食計事、仕御留守役、為用心禁可云合、(D)誑置加様後、引具鎌倉、可切由井浜、又助経触此曲、不有尾籠、被仰、景季承之、尋入合曾我人々申、候上御定、(E)不参狩御友、可被勸仕御屋形留守役、有大事財物共、吉々被守護可候、今渡以外御気色見吉気候、内内承旨候、太多、一定御返後可有御喜覺候、景季加詞可申吉様、(C)返後、可被抽御留守忠勤候立、各々畏申御返事、景季返後、五郎申、一定此事被推察覺候、无佐只今可有斯仰不覺候、啖鳴借梶原源太左衛門思我等誑顔様事吉気、何勸賞、可加様仰有、謀叛者子孫、被許无狩御友无左右推参、被行罪科、蒙御思事不思寄、指当所知行庄苑御公事仕御屋形留守役、又我等有様預大事財物共事不実、御心安者共仕御留守役、於我等不可叶、推此事思、定鎌倉殿仰、(a)昨日晚傾曾我冠者原浮嶋原後馳出来、(b)狩庭志世不有、惣助経覚、又見奴原有様、被思出昔伊藤入道役事不安覺、汝行向奴原、(c)可仕留守役、(d)誑置、其後返様引具鎌倉、可切由井浜云有御定、可有喜不覺、是居有加様仰、去來給十郎殿、我等自大勢行先様、一人烈、出昇綜、(巻七)

まず、頼朝が梶原を召して尋ねる(傍線A)。次いで頼朝自身の思いを述べ(傍線B)、兄弟に伝えるべき賺し文句を用意し(傍線C)、処置を命じる(傍線D)。景季は頼朝の言葉をほぼ繰り返す形で兄弟に伝える(傍線C)と、時致は、二重傍線部のように景季を憎悪したうえで、頼朝の疑問(傍線a)、心中(傍線b)、伝言(傍線c)、真意(傍線d)をまた繰り返す形で推察する。この景季の行動について、山西明氏は「鎌倉殿の命に従つた止むを得ぬ仕儀」としながらも「仮名本に造型される敵役としての景季像の萌芽」と指摘され、大川信子氏も「景季が自らの意志で兄弟と敵対しているわけではない」と指摘されることく、真名本における景季は、頼朝の伝達役にすぎないのである。

これに対して仮名本は、
御寮は、左衛門尉祐経をめして、「不審なる事あり、用心せよ」とおほせ下されければ、かしこまり存候よしを申ける。こゝに、梶原源太景季、侍の所司にて、総奉行なる上、わざん第一の者にて、上の御説をうけたまはり、曾我の人々をちかづけて申けるは、「神妙に御供申さる候。奉公は、いづれもおなじ事、御宿に、大事の物の具あり。留守の御宿直申されよ。いか様、今度鎌倉へいらせましくて、御免かうぶりがたまふべし。奉公心に入られよ」と申ければ、祐成、是非によはずして、「かしこまり候。よき様に御申候へ。たのみたてまつる」とぞ、返事しける。源太、かさねて申やう、「御給仕によりて、本領子細あらじと存じ候」といひてこそ、かへりにけれ。時致、これをきよて、「あはれ、源太、われくをすかささんとおもひたる気色のさしあらはれたる奴かな。蛇は一寸を出して、其大小をしり、人は一言をもつて、その賢愚をしる。狐の子は、子狐より、父が孫をつぎて、此冠者が面のしろさよ。いつの奉公によりてか、御気色もよかるべき。

さだめて、御寮の仰には、其冠者ばらは、誰がゆるして、狩場へはいでけるぞ。よくくすかしておきて、首をきれとの御説か、流罪にせよとの仰にてぞあるらん。げにや、ふるきことばを案ずるに、国の賢をもつて興し、へつらひをもておとろふ。君は忠もて安じ、いつはりをもてあやうし。人は、たくみにしていつはらむよりも、つたなうしてまことあるにはしかず。この者のふるまひことば、世のわづらひともなりぬべし。其上、奉公申べきためならず。あはれ、身におもひだになかりせば、此冠者が面、一太刀きつてなくさまんずる物をこそぞ申ける。さて、兄弟は、見えがくれにつれつはなれつ、心をつくしねらひけるこそ、無慙なれ。
(巻八・富士野の狩場への事)

という記事である。頼朝の疑問・心中・伝言・真意は記さない。景季は、「上の御説をうけたまはり」とあり、あくまでも頼朝の命によつて兄弟を賺そうとするのであるが、時致が事態を推察する言葉の中にも、賺し文句を頼朝が考えたというところまでは至っていない。つまり、仮名本における景季の賺し文句は、景季が案出したものということになる。わずかに、頼朝に関する記述を削除して「煩わしい重複を避けたに過ぎないかも知れないが」、結果的に、兄弟を賺す役割は、景季一人に集中している。また、景季が仮名本の言うように「侍の所司にて、総奉行であつたことは、史料では確認できない。前述の通り、父景時が「侍所所司」であつた。その景時の職掌をそのまま受け継ぎ、景季を有力者として賞揚する仮名本の虚飾である。その有力者が、兄弟を狩庭から遠ざけようとしているのである。さらに、彰考館本と十行古活字本は、語り手のことばとして、景季を「和讃第一の者」と記している。仮名本全てについて言えるわけではないが、景季の人物評が見える箇所である。そして、太山寺本以外の諸本に載る「狐の子は子狐より……」という時致の文言は、父景時も譏言する者だという前

提のもとに語られているものである。景時が讒言する者であるという記述は仮名本『曾我物語』には見られないが、物語の改作者、読者にそうした認識がなければこの文言は解釈できない。また、同じく時致の言葉として、「この者のふるまひ・ことは、世のわづらひともなりぬべし」と、第一節において史料で確認した梶原一族の滅亡に至る事件を予言——語りの時間からすれば——する言葉を語らせるのである。

次に、仮名本にのみ見られる景季に関する記事について検討する。

曾我の人々は、雑人にやまざるゝと、ふるき義に、編笠ふかくひきこみて、太刀脇はさみ、とほる所に、折節、源太左衛門景季、三浦の屋形より返るに、十文字にゆきあひぬ。此人々は、源太とみなし、笠をふかくかたづけ、眈にかけてぞとほりける。源太、これをひかへつつ、「これなる者どものあやしきよ、とまれ」とぞとがめける。十郎たちかへり、笠の下より、「和田殿の雑色也」といふ。「それは何とてしのぶぞや。名をば何といふぞ」「藤源次と申者なり。和田殿、御所へまゐられ候つる暇をはかり、御屋形の次第を見物つかまつり候。義盛かへる時になり候間、いそぎかへり候」といふ所に、梶原が雑色すゝみいで、「藤源次は、それがし見しりて候。これは、あらぬ者にて候」といひければ、「さればこそ、あやしかりつれ。まづうちとらめよ」とて、ひしめきけり。(略・和田義盛の仲裁) 夜半ばかりに、数十人の声して、「まさしくこのほとりなり。こなたにめぐれ。かしこをたづねよ。声なたかくせよ」とて、物の具音しきりなり。五郎きゝて、「昼の梶原が遺恨にて、いたづらなる者ども、討てにおこせりとおぼえたり」。十郎きゝて、「しづまり候へ。楚忽の沙汰あるべからず。内の体も見ぐるし。まづ燈火をけせ」とて下知し、今やとまちかけたなり。

(巻五・五郎と源太と喧嘩の事)

太山寺本以外の仮名本に見られる記事である(一覽8)。浅間の狩庭で、景季の執拗な尋問に時致が反発し、喧嘩となつたところ、和田義盛が仲裁に入り、事態を収拾したという場面である。さらに、夜に入つて兄弟の屋形の周囲に物々しい足音がすると、兄弟はそれを「昼間の梶原の遺恨にて、いたづらなる者ども、討てにおこせり」と推測する。実際は、和田からの差し入れであるわけだが、景季は兄弟に誤解されるような人物なのである。

次の記事は、畠山重忠が兄弟に和歌で狩の最終日を伝えたところ、景季が不審を抱くという場面である(一覽24)。

梶原触状には、明日、鎌倉へ入らせたまふべきなれば、今宵、うたではかなふまじ、此よししらせんと(畠山重忠へ)思ひ給へども、人々あまた有ければ、歌にてぞとぶらひ給ひける。

まだしきに色づく山の紅葉かなこの夕暮をまちて見よかし
とながめ給ひて、涙ぐみたまひけり。折節、梶原源太左衛門がちかうひかへたりしが、「何事にや、曾我の殿ばらに、『まだしきに色づく』と詠じたまふは、心えず」。重忠聞て、「夏山に夕日影ののこる風情、初紅葉ににずや。この夕暮こそ、なほもうつりゆかば、誠秋にやなりゆかん」。源太は、なほもことばあり顔なりしを、君よりいそぎめされしかば、かけとほるとて、「重忠の御歌の不番のこりて」といひながら、はせつきければ、人々聞て、「今にはじめぬ梶原が和讃とはいひながら、ことにかかりて見えぬるをや」と申あひける。重忠おほせけるは、「(略)かやうのえせ者をちかくめしつかひて、末の世いかど」とぞ仰ける。

(巻八・富士野の狩場への事)

ここでは、人々の「今にはじめぬ梶原が和讃」と景季を評する言葉があり、また、重忠の景季を「えせもの」と評する言葉が見られる。そして、「末の

世いかゞ」と、先に指摘した時致の予言と重なる言葉を重忠に語らせているのである。

もう一例、敵討ちを遂げようとする晩に兄弟が和田義盛の屋形を訪れる場面(一覽25)を示す。真名本にも兄弟が義盛の屋形を訪れる記事が載るが、仮名本ではそこに義盛に贈られた激励の言葉を景季に立ち聞かれるという一件が設けられている。

盃二三度めぐりて後、和田のたまひけるは、「あひかまへて、せばよくし給へ。し損じなば、一家の恥辱なるべし。後楯にはなり申べし。頼しく思ひ給へ」とて、盃さ々れけり。折節、梶原源太、屋形の前をとほりけるが、かくいふを聞つけて、「何事ぞや、和田殿。曾我の人々に『せばよくせよ』とおほせられつる、不審なり。御耳にや入候べき」といふ。和田殿きよて、「こはいかに、曲者とほりけるよ、さりながら陳じてみんとおもひければ、「自然の物語、何ときよて、御分御耳にいれんとはのたまふぞ。〈略〉急御申ありて、義盛うしなひ給へ」と、高声也ければ、景季も、「一異にこそ申候へ。何とてか、和田殿は、それがしにあひ給へば、よしなき事にも、角をたてゝのたまふらん。これはくるしからぬ事なり」とて、そらわらひしてとほりけり。なほも和議の者にて、何とかいふと思ひ、しばしたゞずむ。これをばしらで、和田のたまひけるは、「略」この者は、十分にすぎて、いかゞぞとおぼゆる。五郎、是をきよて、「御陳法をもちひず、とをる者ならば、何程の事すべき。しや細首ねぢきりて、すて候べき」と申ければ、梶原たちきよて、まことや、此者は、朝比奈にみぎはまさりの大力、をこの者と聞たり、こゝにて、喧嘩し出、勝負せんよりも、上へ申あげて、我力もいらでうしなはん事、やすかるべしと思ひさだめて、聞ざるよしにて、帰にけり。和田のたまひけるは、「今しばら

くも候て、こまかに物語申たけれ共、源太と申曲者が、御前にまゐりつるが、いか様にか申あげ候なんずらん。あひかまへてし損じたまふな」といひおきて、和田は御前へぞ参られける。

(巻九・和田の屋形へゆきし事)

義盛の二度にわたる「曲者」(伝本によっては「和議者」とする)という景季評は、重忠のそれと共通する。また、景季の言葉に、「何とてか、和田殿は、それがしにあひ給へば、よしなき事にも角をたてゝのたまふらん」とある如く、義盛の景季に対する平生の態度を暗示する言葉がある。

この記事に続き、その夜景季が兄弟の館を襲撃するという記事が載る(一覽26)。景季のその行動を語り手は、「をこがまし」いものと評している。やはり景季は、浅間の狩庭で時致に「昼の梶原が遺恨」と誤解されて然るべき人物だったのである。

このように、兄弟との関わりにおいて仮名本に登場させられる景季は、兄弟の敵討ちを阻害する人物であるとされる。但し、景季は、兄弟の敵討ちの企てを明確に知っているわけではなく、兄弟の仇敵祐経を擁護するものでもない。これらの行動は、待所所司という父景時の職掌を物語の中でそっくり受け継がされた景季として当然の行動といえる。そして、景季のこうした行動が、結果的に、兄弟の敵討ちを阻害するものとして働くのである。

「兄弟が艱難辛苦の末に敵討ちを遂げる」ということが仮名本『曾我物語』の主題であるとは先述したが、その艱難辛苦が大きければ大きいほど、この物語の主題と題材の関連は確たるものになる。敵討ちを遂げようとする兄弟、つまり「主役」に対して、結果的であれ敵討ちを阻害する行動をとる役割を担われる景季は、その登場場面においては「対役」である。「対役」景季の妨害行為は、兄弟の艱難辛苦をより大きなものとするのである。

すなわち、「対役」として登場させられる景季は、仮名本『曾我物語』の主
題の提示を分担させられているのである。

四

他の文芸作品では景季がどのように造型されているかを見てみたい。

景季は、『平家物語』の並み居る源氏方の武人の一人でもある。義仲の
追討軍として、宇治川で佐々木隆綱と先陣を争い、平家を追い落とし生田
の森で奮戦する様も記されている。そうした一武人である景季は、延慶本
では次のように造型されている。

ミレバ佐々木ノ四郎隆綱也。引セタル馬三疋ノ内ニ生喰アリ。梶原(景
季)ト申ハ大悪心ノ腹悪也。死生不知ノ切通ニテ侍ケルアヒダ、生
喰ト云ツルヨリシテ、身ヨリ猛火ヲ燃ケル。弓矢取ノ習ハ、必シモ親
ノ敵、宿世ノ敵ヲノミ敵ト云カ。当座ノ恥コソ親ノ敵ニモマサリタレ。
コレ程主ニニクマレ奉タル景季ガ命イキテハナニカハスベキ。口惜事
シ給ツル鎌倉殿哉。是ミヨカシト思ガホニテ、「マ先ニ引セタル佐々
木ニ過タル目ノ敵ハ有ベカラズ。木曾ノ冠者ヲ打ムヨリハ佐々木ヲ打
ム」ト思テゾ、「アノ馬ヲバ隆綱ニハ給ツラム。只一矢ニ射落シテ、生
喰ヲバコ、ニテコソ給ラメ」ト思テ、矢ヲバネトキテ押クツログ、モ
トハズスヘハズシメオホセテ、郎等八騎有ケルニ用意セサセテ待懸タ
リ。梶原ハ諸人ニニクマレケル間、用心スル事ヒマモナシ。サレバ、
人ハキザリケレドモ、胃ヲソキタリケル。

(五本ノ六・梶原与佐々木馬所望事)

景季は、「大悪心ノ腹悪」であり、「諸人ニニクマレ」る存在であるというの
である。延慶本のこの記事に相当する場面を寛一本では、

梶原(景季)「やすからぬ物也。都へのほつて木曾殿の御内に四天王

ときこゆる今井・樋口・楯・祢并にくんで死ぬるか、しからずは西国へ
むかうて、一人当千ときこゆる平家の侍どもといくさして死なんとこ
そおもひつれ共、此御きそくではそれもせんなし。こゝで佐々木にひ
つくみさしちがへ、よい侍二人死んで、兵衛佐殿に損とらせたまつ
らん」とつぶやいてこそまちかけたれ。
(巻九・生ずきの沙汰)

とする。景季の言葉から、景季は、いわば逆恨みをするような人物である
ことは知れるが、延慶本のように記さない。
また、延慶本には次のような記事も載る。

梶原源太景季、係ル時ハハタヲサ、ゲホロヲカケ、引時ハ、イツノホ
ドニマクラム、ハタヲマキホロヲヌイデ、度々入替く戦ケリ。武芸
ノ道ニモユ、シキ者ナリケル中ニ、ヤサシキ事ハ、片岡ノ桜ノイマダ
青葉ナルヲ一枝折テ、エビラニ差具テ、敵ノ中ニテシバシ戦テ引ケレ
バ、桜ガ風ニフカレテサトチリニケリ。敵モ御方モ是ヲ感ジケル所ニ、
城中ヨリ齡三十計ナル男ノ、褐衣ノ直垂ニ洗皮ノ鎧キテ、馬ニハノラ
デ、弓脇ニハサミテス、ミイデ、申ケルハ、「本三位中将殿ノ御使ニ
テ候。桜カザ、セ給テ候ニ、申セトテ候。

コチナクモミニルモノカハサクラガリ

ト申ハテネバ、源太馬ヨリ飛下テ、「暫ク御返事申候ワム」トテ、

イケドリトラムタメトオモヘバ

トゾ申タリケル。
(五本ノ廿・源氏三草山井一谷追落事)

この梶原花籠の記事は、景季が歌道にも通じていたという事を記してい
る。寛一本にはこれに対応する記事がない(巻九ニ二度之懸)。

景季は、延慶本『平家物語』においても「諸人ニニクマレ」る人物である。
また、武人としてだけでなく、歌も詠む「ヤサシキ」者である。仮名本『曾
我物語』に登場する憎まれ役としての景季像と、歌よみとしての景季像と、

相通ずる造型が見られる。ただし、語り本系諸本では、景季は鮮明な人物造型はされず、生田の森での梶原二度の懸けにしる、義経との対立にしる、鮮烈な印象を放つのは、父景時である。

『義経記』にも景季は登場させられている。しかし主人公義経の行動を阻むのは景時である。景季は、土佐坊と登場するものと、父景時と共に登場するのみであり、景季が積極的に行動して義経の行動を阻むことはない。巻第六「静鎌倉へ下る事」において、景季の宿所を産所に定められた静御前の言葉の中に、「都を出し時よりして梶原といふ名を聞くだにもこゝる憂かりしに」とあるように、「梶原」と一括されて嫌悪の対象となる。景季個人に対する評は見られないのである。

土佐坊・景時、いずれにしても頼朝側の人物であり、主人公義経と敵対する位置にある。『義経記』における景季は、そうした人物のもとで義経の行動を阻止する存在なのである。

他に、『泰衡征伐物語』に景季についての記述があるが、第一節で引用した、『吾妻鏡』文治五年七月二十九日条に記された歌に関するものである。作品に登場させられた梶原という観点から見れば、『泰衡征伐物語』において、由利八郎を不当に扱った景時の記事に比較すると、景季の歌に関する記事は、物語の本筋から逸れた些細なものである。

いずれの作品においても、仮名本『曾我物語』のように重要な人物として景季が登場させられることはない。梶原氏を代表するのはやはり景時なのである。

おわりに

史料からうかがえる景季は、頼朝の忠実な武人であった。梶原一族として、その滅亡を京都の貴族が喜んだとしても、表面的な非難は景時に集中

している。『愚管抄』に「不力思議ノ風聞アリキ」として載るのみといったごとくである。

そうした頼朝の忠臣景季は、真名本『曾我物語』において、際立った取り上げ方をされることはなかった。それが仮名本『曾我物語』では、「主役」の兄弟の敵討ちを阻止する「対役」として取り上げられるようになった。仮名本『曾我物語』は、その主題を鮮明にするために、兄弟の敵討ちを阻止する役が必要なのであり、その役を、景季が担わされたのである。景季は、一方では頼朝の側近、当代の歌よみという時流に乗った人物として、一方では「和護の者」「曲者」「えせ者」として兄弟の行動を妨害する人物として、二方向の造型をされている。妨害する者が、時流に乗った有力者であるほど、敵討ちの障壁は高くなるのであり、この二方向の人物造型は、仮名本『曾我物語』にとって必要であったわけである。

なぜ、景季が兄弟を阻止する役割を担当させられたのか。史実として、父景時は御家人を統括する職にあり、景時の讒言は『吾妻鏡』に記されている。安田義實・梶原景季の件で、「後害を顧み、敢へて披露無きの処、梶原源太左衛門尉の妾、夫景季に語り、又父景時に通ず。景時將軍家に言上す」という記事からもわかるように、景時同様景季も、御家人たちに目置かれる存在であったであろう。慈母も「風調」として景季の告げ口を伝えている。文芸の世界では、景季が大きく採り上げられることはなかったが、『平家物語』や『義経記』に義経と対立する景時が描かれている。また特に延慶本『平家物語』では「憎まれ役」としての景季が記されている。そうした史料や文芸的なものに記されたものとともに、真名本では、頼朝の言葉の伝言者として、兄弟を阻止する方向で行動する景季が登場していた。それは頼朝の忠臣の姿であったが、時致の怒りの対象となり得た。仮名本『曾我物語』の改作者は、他の文芸作品で大きく採り上げられることのなかつ

た景季に着眼し、物語の主題を深化させるべく、景季に兄弟の行動を阻止させるのである。義経における景時が、曾我兄弟における景季なのである。それは、改作者にとっても読者にとっても何ら矛盾のない、しかし新しい「憎まれ役」の創出だったのである。

真名本に登場した景時は、仮名本においてはなぜ姿を消されていたのか。いまだ十分な考えを持たないが、一つには、兄弟との年齢的な隔たりがあげられよう。遊女を巡って五郎と恋敵となる章段が仮名本に増補されたことは先述の通りだが、そのためには、景季のほうが適切である。また一つには、『平家物語』の「逆櫓」に代表される悪役景時を踏まえて、子息景季に視点を転じ、「憎まれ役」を景季一人に集中させた仮名本『曾我物語』の独創性の結果とも言えよう。このことについては、真名本では梶原景時・畠山重忠の鷹狩りを巡る論争があるが、仮名本にはその記事は載らず、梶原景季・畠山重保の鹿論が展開されることや、仮名本における和田義盛子息・朝比奈義秀の登場など、いわば第二世代の活躍とも併せて考えねばなるまい。真名本における景時の、側近として、歌よみとしての人物像は、そのまま景季に受け継がれ、景時は物語から姿を消された。他作品、史料等に見られたような、景時に代表される「悪役」梶原氏は、仮名本『曾我物語』では、景季に代表させられたのである。

[注]

- 1 真名本テキストは、底本を妙本寺本『真名本曾我物語』(昭和四九年、勉誠社、影印)として引用し、大石寺本(静嘉堂文庫蔵本)を参照した。返り点については角川源義氏『貴重古典釋妙本寺本曾我物語』(昭和44年、角川書店)、訓読については東洋文庫『真名本曾我物語1』(昭和62、63年、平凡社)を参照した。
- 2 仮名本テキストは、底本を十行古活字本『日本古典文学大系曾我物語』(昭和41年、岩波書店)とし、引用した。必要に応じ、以下の仮名本諸本の異同を略号(傍線部)を用いて示した。太山寺本『太山寺本曾我物語』(昭和63年、汲古書院、影印)。

1 剽考館本『伝承文学資料集影考館本曾我物語』(昭和46、53年、三弥井書店)、万法寺本『曾我物語(万法寺本)』(昭和35年、古典文庫)、円成寺本(筑波大学蔵本)、王堂本『王堂本曾我物語』(昭和14、15年、岩波文庫、岩波書店)、流布本(麗澤大学蔵、寛文二年刊、国文学研究資料館マイクログラフフィルム)。

2 是昨日御堂供養之間。義資投籠書於女房聽聞所訖。而願後書。敢無披露之処。梶原源太左衛門尉景季(号龍樹前)語夫景季。又通父景時。々々言上將軍家。仍被亂明真偽之時。女房等申詞符号之間。如此云々。(『吾妻鏡』建久四年十一月二十八日条)

3 『寒川町史1 資料編 古代・中世・近世(1)』221、222頁(平成2年、寒川町)。鳥養直樹氏は、解説に、徳大寺家と鎌倉幕府との関係を描きされ、「梶原一族の歌や芸能に対する棄養も、この交わりのなかで培われた」と述べておられる。

4 日本古典文学大系『愚管抄』補注(卷第六、二七)による。

5 佐藤和夫氏は、「景時の讒言は、幕政中枢の立場からのものであり、本質的には讒言とは言えない内容のものが大部分である」とされ、『吾妻鏡』の景時に関する記述について、「政治権力闘争の意図した作為からの記述」とされる(『日本中世水軍の研究』(平成5年、錦正社)第一巻第五節)。

6 仮名本のうち、円成寺本は、景季が通達したとする。

7 諸本異同 太はせめぐるけしきあたりをはらふてぞ見えし 万はせめぐるあたりをはらひてぞ見えし 王・馳せめぐる美々しさ、あたりをはらひてぞ見えし 流はせめぐるていのびどしさ、あたりをはらひてぞ見えし

8 『曾我物語在地性の変容と保持—畠山氏説話を中心として—』(『国語と国文学』720号、昭和59年2月)

9 『真名本』『曾我物語』研究—梶原氏概観—(『常葉学園短期大学紀要』20号、平成7年11月)

10 諸本異同 太さぶらひのしよしにて奉行をうけ給はりけるが 万さぶらひのやくにてそうぶぎやうたるうへみだいのものにて 王・侍の所司にて馳奉行第一の者なれば 流さぶらひのしよしにてそうぶぎやうだいのものなれば

11 諸本異同 太れいのわざんものが 影梶原といふわざん物めが

12 (付記) 本稿は、單記と語り物研究会第三〇八回例会(平成9年11月、於青山学院大学)において口頭発表したものを再考し、まとめたものです。席上、多くの貴重な意見ご指導を賜りましたことを感謝申し上げます。